
国立アイヌ民族博物館 研究プロジェクト 2022A01

17～19 世紀の蝦夷地像に係る図像史料等の基礎的調査

報告書



「酒宴図」平沢屏山 国立アイヌ民族博物館収蔵

研究プロジェクト 2022A01 17 ～ 19 世紀の蝦夷地像に係る図像史料等の基礎的調査

研究代表者：霜村紀子

研究メンバー：劉 高力、シンウォンジ、深澤美香（2022 年）

研究協力：佐々木史郎（館長）、永野正宏（調査官）

研究協力者：中村 和之（函館大学商学部、教授）

本調査研究では、17 ～ 19 世紀の北海道、樺太、千島列島に関する図像資料や文献について、「職貢図」、「アイヌ絵」、「朝鮮の蝦夷認識」等の 3 軸をテーマに設定し、基礎的な情報収集および史料の所在調査と収集を行った。

アイヌ絵に関する調査について

2021 年度の個別研究 2021B05「アイヌ文化を画題とした絵画史料について—揺籃と終焉—」を発展し、アイヌが描かれた絵図・絵画等の資料閲覧および文献調査を行った。当館収蔵のアイヌ絵の制作者から、18 世紀中頃に松前を中心に活躍した小玉貞良、19 世紀後半に函館で活躍した平沢屏山、1880 年代にアイヌ絵を制作した平福穂庵を主な調査対象とした。

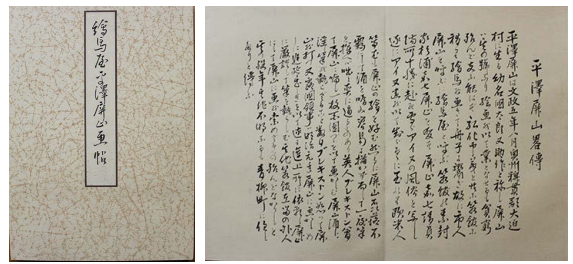
資料調査の成果を活かし、令和 4 年度の基本展示「私たちの交流」外からみたアイヌ文化において、平沢屏山「蝦夷風俗十二月屏風 三月、四月」（花巻市博物館蔵）、平沢屏山「アイヌ風俗画」（岩手県立博物館蔵）等を展示紹介した。

令和 5 年度の基本展示「私たちの交流」外からみたアイヌ文化で、「北海道土人画卷」木村巴江（北海道函館中部高等学校蔵）、「蝦夷風俗図会」加賀伝蔵（函館市中央図書館蔵）、「実験北蝦夷／山川地理取調図 首」松浦武四郎（函館市中央図書館蔵）等を展示紹介し、今期の見どころで資料紹介を行った。また、平福穂庵のアイヌ絵に関する調査の成果を、函館市北方民族資料館講座にて発表した。

本報告書では、19 世紀後半に函館でアイヌ絵を制作した平沢屏山を取り上げ、研究プロジェクトで調査した作品と印章をリスト化し、参考画像を加えて報告する。

屏山の略歴がわかる資料として、「絵馬屋平澤屏山画帖」（編著者不明・年代不詳 函館市中央図書館蔵）には、冒頭に「平澤屏山畧傳」がある。屏山の死後に記されたもので、『北海道人名辞彙』とほぼ同じ内容が記されている。

「平澤屏山は文政五年八月奥州稗貫郡大迫村に生る。幼名國太郎又助作と称し屏山はその号なり。絵画を以て業となせるも殆んど支ふ能はず。弘化中弟と共に箱館に移り絵馬を画きて舟子に鬻ぎ故に市人屏山を呼ぶに絵馬屋と呼ぶ。箱館の素封家杉浦嘉七屏山を愛す。屏山嘉七請負場所十勝に赴き専らアイヌの風俗を写し遂にアイヌ画を以て知らるるに至れり。欧米人等尤も屏山の絵



「絵馬屋平澤屏山画帖」函館市中央図書館蔵

(マ)
を好む。然るに屏山磊落不羈にして酒を嗜み容易に描かず。而して一度揮へば咄々真に迫るものあり。英人ブレキストン曾て屏山に囑し一枚百圓づつを以て画かしむ。屏山酒に淫し筆を執らざること数日ブレキストン怒って屏山を打つ。又露国領事に明治元年屏山に画かしめしに遅延甚しきを以て遂に運上所に依頼し屏山に厳談して筆を執らしむ。其他箱館在留の外人にして屏山に画を求めざるもの殆んどなかりしと。其の没年其他不明なるも青柳町に住したりと伝ふ。」

屏山はなぜ函館に移り住んだのだろうか。18世紀末から松前・蝦夷地においては、出稼ぎの漁民や東北地方の飢饉のため蝦夷地に移る人びとが多く、人口が増大しつつあった。場所請負制による漁業の大規模化により、松前・江差・箱館の三湊は流通の拠点とし、役所的な機関が配置され、商人の店舗のほか、生活する人びとの食べ物や日用品を扱う店等が整い、発展していく。日雇の雑多な仕事もあった。当時の東北・北陸地方では、松前・蝦夷地は、生活の糧を得ることができる出稼地として魅力ある場所と捉えられた。漁民だけではなく、農民や、諸職の家業がありながら出稼ぎに行く者もあり、各藩では他領への出稼ぎ禁止する布達を出すこともあった。生活に困窮していた屏山が蝦夷地に希望を持って移り住んだことは想像に難くない。

また、1792(寛政4)年にロシア使節ラクスマンが根室に来航し、幕府は蝦夷地警備のため東北諸藩に警備兵の派遣を命じ、盛岡藩(南部藩)は翌年以降、幾度か派兵を行った。蝦夷地が幕領化された期間1799年～1821年と1855年～1868年には、盛岡藩(南部藩)は元陣屋を箱館に置き、長期にわたる北方警備を行った。屏山が大迫で暮らしていた頃、箱館の様子は大迫にも伝わっただろう。

2. 平沢屏山の画業について

屏山が蝦夷地に渡った時期は「弘化中」(1845～48年)とされ、それ以前も絵画で職業としていたとある。屏山が誰に絵を学んだかは、情報がなく不明である。大迫で200年以上続く「大迫あんどんまつり」の山車は、南部風絵に影響を受けているといわれる。屏山も幼少期にあんどん祭りや、南部風絵を目にする機会があったであろう。大迫町史編纂に携わった小野義春氏によれば、「彼(屏山)のアイヌ絵には、どこか大迫町に伝わるタコ絵やあんどん絵などに共通するものがある」、「当時大迫ではタコ絵やあんどん絵が盛んだった」とされ、「平沢屏山もその技術を下地に腕をみがき、神社に奉納する絵馬などを描きながら細々と生計をつないでいたようだ」と推察されている。また、佐々木利和氏によれば、「この近隣には南部小絵馬の伝統もある。屏山はここでも絵馬やであったと思われる。実際かれの絵に一貫して流れているものは絵馬的技法であるといっても過言ではなかろう」としている。

屏山が箱館に移住した後に、アイヌを画題とした時期は不明であるが、杉浦嘉七の請負場所である十勝を訪れ、アイヌの風俗を写し、「アイヌ画」を描いてその名を知られるようになったとされる。



風絵（平維茂と鬼女）、風絵（金太郎と猪）
大迫の旧家から見つかった幕末頃のもの
画像提供 花巻市総合文化財センター



アイヌ風俗十二ヵ月屏風（8月）（9月）部分
平沢屏山 市立函館博物館蔵

3. 平沢屏山の印章と作風について

本研究プロジェクトでは、花巻市博物館、岩手県立博物館、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館、市立函館博物館、函館市中央図書館、天理大学附属天理図書館、北海道博物館において、平沢屏山作とされるアイヌ絵を中心に調査を行い、リストにまとめた。参考資料として、東京国立博物館、オムスク造形美術館の制作年代がわかる作品情報を追加した。

越崎氏の印章の分類に従い、制作年を確認した。制作年が分かる作品やおおよそ推定できる作品は年代順に描写を比較し、作風の変遷ををたどることを試みる。

越崎氏は、落款について、「屏山は自らの名を書かず印章のみを用いた、印章も時代によって異なる」とし、8タイプを挙げている。

(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)
氏平 印澤	之屏 印山	氏平 印澤	澤平	氏平 章澤	臨背 水山	野九 鶴泉	草男
山屏	澤平	山屏	山屏	樵屏 者山	註 高サ二センチ半、巾一センチ		園木々
		註 寸法二個共二センチ角		註 寸法三センチ半角			山屏

「繪馬屋・平澤屏山の話」川崎左右一
『北海道倶楽部』1936年 より転載

1「平澤氏印」「屏山」、2「屏山之印」「平澤」、3「平澤氏印」「屏山」、4「平澤」「屏山」、5「平澤氏章」「屏山樵者」、6「背山臨水」、7「九鼻野鶴（マ *雀）」、8「男草」「木々園」「屏山」
1と2は初期、3は中期・後期、4～7は後期、後期に5「平澤氏章」と3「屏山」の組み合わせて用いる場合もある。

佐々木利和氏によれば、国内の「およそ 60 例ほどの作品の中でも、落款のあるものが数例であり、

製作年次が判るもの（すなわち紀年銘のあるもの）についてはわずか三例のみ」、「欧米に存在する屏山の作品は、日本とはことなり、在銘（落款、紀年）のあるものが多くみられる」という。『アイヌの四季と生活』図録 1999 年では、国内の 3 例とは、東京・個人蔵の「オムシャ図」「熊送り図」、札幌・個人蔵の「神祈り図」としている。

越崎氏は、材質について、「屏山は絹本には餘り筆を執らなかつた様で殆ど紙本が多く、絹本は初期だけではなかつたかと思ふ」と、絹本のものを初期としている。

「アイヌの容貌も晩年のものに比すれば凄みに乏しく、大體に於てこれは彼のアイヌ繪研究の初期に屬するものであらうと思ふ。」と、人物表現の迫力が欠けているものを初期とする。

越崎宗一氏は、屏山のアイヌ絵を前期・中期・後期に分け、特徴を述べている。ただし、明確な年代は記されていない。

○前期 アイヌ写生の初期の作品で、未だ屏山のアイヌと謂うべき型が出来ていない、書かれているアイヌも頗る柔和でグロテスク味に乏しく

此期の作品を屏山の偽物という説もあるが、越崎氏は屏山は偽物を作られる程有名ではなかった、偽物を作り売る目的ならば中期や後期の作品に似せるべきという理由から偽作説に賛成出来ないとする。

○中期 アイヌ写生は可成り確實さを持ち彼のアイヌ絵の型ともいべきものを備えて来ているが絵画としてのうま味に乏しい、アイヌにしても凄味が少く絵が幾分硬いためか後期の作の如く人物が画面に躍動している感じを受ける事は出来ない

○後期 屏山がアイヌ描写に没頭してアイヌ絵を自分のものとしてしまった後の作品であるアイヌ容貌の特有の凄味、毛髪の手書き方、盛れ上った肩、獸類を思わせる足形などの特徴は最早や何人をも追従せしめず更に円熟した達者な描線は画面にアイヌを躍動せしめている。

1) 印章 1 「平澤氏印」「屏山」について

越崎氏が印章 1 とした作品の画像はなく、同じ印章と断定はできない。印章 1 と絹本を初期としていることから、絹本で印章の文字が同じという条件では、No. 5 「アイヌ風俗」、No. 23 「アイヌ熊送の図」、の 2 点が該当すると仮定する。この 2 点は 2 種の印章ともに一致する。印章 1 「平澤氏印」の「澤」の「幸」の文字が、「東」のように見える。印章 1 「屏山」の文字は、四角形に収まるよう同じ長さで揃えられている。

印章 1 「屏山」印は、紙本では No. 53 「マレック漁図」にも用いられる。3 点ともに制作年は不明。

No. 5 「アイヌ風俗」は、背景の山や岩の線は抑揚がなく、人物の表情は柔和で凄みに欠け、髪の手書きが直線的である。輪郭線に力強さを感じられない。No. 23 「アイヌ熊送りの図」は、山の峰や海等の背景、木幣（イナウ）やござ等の民具、人物の髪の手書きや手の指等が直線的に描かれ、衣服や漆器の文様は定型化している。全体的に絵手本をやや粗雑に写した表現となっている。2 点には鮮やかな青色、明るい緑色の色材は見られない。



No. 5、No.23 印章部分



No.53 印章部分

晩年の代表作とされる「アイヌ／蝦夷風俗蝦夷十二ヶ月」とは、同一人物と思えないほどの描写の違

いがあり、一人の画家の作品という前提で、描写が拙いことから初期とする説も頷ける。一方で、大迫で学んだとされる行灯や風絵、絵馬等に見られる輪郭線の抑揚や力強さ等の特徴が見られない。

印章1「平澤氏印」「屏山」については、越崎氏がもとした作品の確認を継続するとともに、屏山であれば制作時期の再考、また別の作者として再考する余地を残しておきたい。

2) 印章2「屏山之印」「平澤」について

今回の調査では、印章2「「屏山之印」」の作例が確認できなかった。

3) 印章3「平澤氏印」「屏山」について

印章3「平澤氏印」「屏山」を使用した作品の制作年代をたどり、1850年代から1870年代最晩年まで長年使用されたことが確認できた。

No.4「種痘施行図」1857（安政4）年

No.50「酒宴図」1855（安政2）年／1867（慶応3）年

No.53、54「アイヌ風俗図」[1872（明治5）年]

No.1、2「蝦夷風俗十二ヶ月屏風」1872～1876（明治5～9）年頃

No.9、12、13「アイヌ風俗十二ヶ月屏風」1872～1876（明治5～9）年頃 No.4、54 印章部分

No.32、33、34「蝦夷風俗十二ヶ月」1872～1876（明治5～9）年頃

印章3「屏山」は、「山」の中央の縦線が一番高く、左右は低く、わずかに曲線を描き両側に開いている。

1850年代のNo.4と1870年代のNo.54の印影を比較すると、印章3「平澤氏印」は文字が少し不鮮明になる。

No.4「種痘施行図」は、制作年が明確な作品としては最も古く、杉浦嘉七が平沢屏山に描かせ、箱館奉行村垣淡路守に献じたものと伝わる。衝立を背に、村垣淡路守が中央に、その左右に代官が座り、種痘の様子を見守る。医師の桑田立斎は黒紋付きを着て緋毛氈に座り、弟子の西村文石とともに種痘を施す。種痘を受けるアイヌは、ひとりひとりの髪型や表情、衣服が百人百様に描き分けられている。袖口や裾、背中に切伏がない衣服も多く見られる。行李に福島屋を示す商号



No.4 部分

「丸十」が見える。背景の衝立には、函館八景と思しき8つの名所を配置した水墨画が描かれている。屏山と同時代に北海道でアイヌ絵等を制作していた絵師に早坂文嶺（1797-1867）がいる。文嶺の「函館八景」函館市中央図書館蔵は、亀田落雁、称名晩鐘、水源夜雨、立待秋月、駒嶽暮雪、七重晴嵐、弁天夕照、山背帰帆の8場面で構成され、各4場面が2枚の扇面に描かれている。「種痘施行図」の衝立をみると、八景は描き手により場面構成は異なるが、左上に立待秋月、水源夜雨、右上に駒嶽暮雪と共通する風景が確認できる。この「種痘施行図」は定型化する前の原型と考えられる。晩年は人物表情や衣服、動き、一定数の人物群を組み合わせが定型化し、同じ画題の作品が構成要素の組み合わせを変えて、くりかえし制作される。

No.53、54「アイヌ風俗図」は、『東京帝室博物館列品記録簿』によれば、1872（明治5）年5月に山高信離より寄贈された。山高信離は1827年10月27日に奥国博覧会事務局の書記官に任命された人物

である。明治政府から各府県への出品物の蒐集の布達があり、開拓使には、1872年正月付で「博覧会事務取扱」から同年6月末までに、北海道の諸産物を買上げるため、博覧会事務局へ差し出すよう指示があった。同月、「北海道産物之大略」という詳細なリストを添えて、鳥獣・魚・海産物、草木、鉱物、人造物（アイヌの衣服、民具類）、そのほか珍奇な物をそれぞれ2点ずつ、追加で依頼があり、これらには産地や用法を書き添えるよう指示があった。2点とは、1点は博覧会出品、1点は博物館の常備陳列品である。博覧会会場に民具と共に展示される目的で、アイヌ民族の男女を一組で描いた図説のため、背景には何も描き込まれなかったと考えられる。

「奥国維府博覧会出品撮影 蝦夷織物・人物ノ画」の画像を見ると、博覧会に出品されたものは、男性の像に印章は見当たらず、女性の像には右下に「平澤氏印」の印章らしきものが見える。印章の有無や違いから、東京国立博物館所蔵の「アイヌ風俗図」は博物館の常備陳列品と考える。東京国立博物館の『列品記録簿』枠外に、「昭和拾年六月拾日表装ニ付壱枚ヲ半双ニ改メ二枚折以下参拾参字増加」と書き入れがあることから、1872年の受け入れから1935（昭和10）年までは、一枚物の唐紙に二人の人物が描かれた資料で、1935年6月に半双、二曲一隻の屏風に表装された。その後、時期は不明だが、屏風からパネル貼装に改められ、2016（平成28）年から翌年にかけて再度修理により、現在の2面の額装になった。



「奥国維府博覧会出品撮影 蝦夷織物・人物ノ画」 右は部分拡大

東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

4) 印章4「平澤」「屏山」について

印章4「平澤」「屏山」はセットで、No.3「アイヌ風俗図」、No.6「マレック狩の図」、No.41～48、50～52「蝦夷風俗十二図」等に見られる。総じて制作年代は不明である。印章4「屏山」は、「屏」が大きく、「山」は幅が狭く、3本の線が上を向く。

No.3「アイヌ風俗図」は絹本であり、越崎氏は印章4は後期、絹本は初期だけと見ており、矛盾が生じている。祭壇の前に、花ござを敷き、家族が集い、儀礼を行う。祭壇には木幣が結びつけられおり、新旧もしくは樹種の違いにより、白色と肌色の二種が見られる。長老は陣羽織と光沢のある黒地の着物を着て盛装し、中央に座す。左手にお酒が入った椀を載せた高坏を、右手にイクパスイを持ち神への祈りを捧げる。女性は傍らの子供をあやしながら、酒を振る舞う。女性の口元と両手に刺青がある。酒が注がれた椀が男性に手渡され、順に祈りを捧げる。その後に、踊りと唄の酒宴が始まる一連の流れがひとつの場面に描く。人物は指の長く伸びた爪まで細かに観察されている。光沢のある材質の着物や漆器は、輪郭線に金泥のような明るい色を用いて表現し、樹皮衣や植物を編んだござ、木製の小刀、煙草入れ等には用いず、素材を描き分けている。輪郭線は比較的同じ太さで強弱はなく、にぎこちなさが残る。色材に鮮やかな青色や明るい緑色は見られず、背景は祭壇のみで、周辺の風景や建物は描き込まれていない。



No.3 印章部分

No.41～48、50～52「蝦夷風俗十二図」は、一人あるいは一組の人物を対象とした簡潔な画面構成である。背景も遠景や中景といった層をなさずに、人物がいる場所を、山か海か、簡潔に表している。山並みは墨と緑を輪郭線は描かずに淡彩で描く。遠景の帆船は帆のみで船体は見えない。漁労を行う舟の

周辺のみ波の描写がある。人物は大きく形を捉え、衣服の襷等の線描は少ない。衣服の切伏は墨一色で、刺繍は白色。髪の毛は濃い黒で塗り、筆で毛先の表現をしている。民具に細かな描写はない。色材の種類は少なく、鮮やかな青は見られない。1つのテーマを大きく捉えて簡素に描いており、人物が定型化する前の作品と考えられる。

また、No. 41～52「蝦夷風俗十二図」12枚1組の作品に、印章4「平澤」「屏山」11点、印章3「平澤氏印」「屏山」1点、両者は同時代に平行して使用したことが確認できた。当初より1組として考えず、単体での作品を12枚揃えて1組としたとも考えられる。

5) 印章5「平澤氏章」「屏山樵者」について

印章5「平澤氏章」は、1850年代から1870年代最晩年まで長年使用されたことが確認できた。組合せは印章5「屏山樵者」に限らず、印章3「屏山」や印章8「木々園」No. 29「絵馬屋平沢屏山画帖」を使用した例があった。

No. 18「ウイマム図絵馬」1855～1860（安政年間）、印章5「屏山樵者」

No. 10、11、14「アイヌ風俗十二ヶ月屏風」1872～1876（明治5～9）年頃、印章3「屏山」・印章5「屏山樵者」

No. 31「蝦夷風俗十二ヶ月」1872～1876（明治5～9）年頃、印章5「屏山樵者」



No. 18「ウイマム図絵馬」は箱館弁天町の近江商人国領平七が、手船金晴丸の航海安全を祈願し、安政年間に新潟の白山神社に奉納した絵馬である。国領の持ち船の名称は、浦河神社の絵馬に「明治七〇戌年六月吉日 渡島国亀田郡函館国領平七船 拾六人乗 金悦丸與三郎」という墨書があることから、1874年は「金悦丸」、他の船も「金」で始まる名称と考えられる。松前藩の家紋の丸に武田菱の文様が入った幔幕を通り、盛装したアイヌ5人が連れだって松前城へ御目見得に向かう様子を表す。先頭は白髪で緑地の着物に赤い陣羽織を羽織った長老、灰色の髪で黒地の着物に緑の陣羽織の男性、黒髪で切伏に刺繍を施した着物に青い陣羽織を羽織った男性、白髪で緑地の着物をまとい腰に煙草入れと煙管を下げた男性、最後に切伏に刺繍を施した着物のうゑに切伏と刺繍を施した樹皮衣を羽織った女性である。

長老の陣羽織や黒地の衣服は、素材の光沢を金泥か黄土のような明るい色を輪郭線に用いる。長老の黒地の衣服に唐草文様はNo. 3「アイヌ風俗図」に似る。1850年代後半には、屏山はアイヌの衣服や煙草入れを目にし、アイヌ風俗を画題とし、依頼を受けて制作していたことを裏付ける絵馬である。

また、印章4「平澤」「屏山」と印章5「平澤氏章」「屏山樵者」については、No. 1、2「蝦夷風俗十二ヶ月屏風」・No. 9～13「アイヌ風俗十二ヶ月屏風」・No. 31～34「蝦夷風俗十二ヶ月」12枚1組の作品に平行して使用したことが確認できた。

6) 印章6「背山臨水」について

印章6「背山臨水」の関防印は、年代のわかる資料では、1850年代から1870年代最晩年まで長年使用され、印章3「平澤氏印」「屏山」および印章5「平澤氏章」「屏山樵者」の組み合わせが確認できた。

No. 4「種痘施行図」1857（安政4）年、印章3「平澤氏印」「屏山」

No. 1、2「蝦夷風俗十二ヶ月屏風」1872～1876（明治5～9）年頃、印章3「平澤氏印」「屏山」



No. 4 印章部分

No. 9～14「アイヌ風俗十二ヶ月屏風」1872～1876（明治5～9）年頃、印章3「平澤氏印」「屏山」、

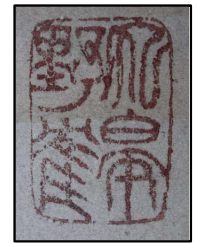
印章5「平澤氏章」「屏山」、印章5「平澤氏章」「屏山樵者」

No. 31～33「蝦夷風俗十二ヶ月」1872～1876（明治5～9）年頃、印章5「平澤氏章」「屏山樵者」、印章3「平澤氏印」「屏山」

そのほか制作年代不明の印章4「平澤」「屏山」と組み合わせた作品も数多くある。

7) 印章7「九梟野鶴」について

印章7「九梟野鶴」とされる印章は、No. 16「挨拶図」の印章「九梟野雀」と同一のもので、最後の文字は鶴ではなく、雀が正しい。制作年は不明。



No. 16 印章部分

8) 印章8「男草」「木々園」「屏山」について

これらは、No. 29「絵馬屋平沢屏山画帖」に使用された印章である。印章8「屏山」は印章1「屏山」と似ているが、「屏」の「并」の横2本が左に突き抜けている点が異なる。

「屏山」印は数種類あるため、細部を慎重に比較し、分類していく必要がある。

越崎氏は触れていないが、No. 29「絵馬屋平沢屏山画帖」にはもう1種「鳳山」という印章が使用されている。



No. 29 印章部分

9) 印章9「嘯雲海」について

印章9「嘯雲海」の読みは佐々木利和氏の研究を参考とした。越崎氏の研究にはないが、佐々木利和氏によって確認された。一文字目は嘯、啗、嗜にも似ている。

No. 25～28、No. 63では単体で使用、No. 7、8、21では関防印として組み合わせて使用している。No. 21「平沢屏山アイヌ画1」に見られることから、1860年代の使用が確認できた。



No. 25 印章部分

No. 21、No. 22「平沢屏山アイヌ画1・2」は、イギリスの商人トーマス・W・ブラキストン宅にあったものと伝わる。ブラキストンは1860年に軍務で中国に派遣され、1861年7月に箱館に立ち寄り、1863年に再び箱館を訪れ、製材業をはじめ貿易商として活動し、1884年に帰国した。「一枚百円で描かせる約束をして船場町の自宅に泊めていたが、平沢は酒ばかり飲んでいて約束の期日を過ぎてもさっぱり描かないので、ブラキストンは怒って屏山を殴打した」と伝わるため、ブラキストンが箱館に住んだ1863年以降に制作されたと考えられる。地引き網漁の場面では、和船が停泊する海辺で、和人の指揮のもとでアイヌが網を引く様子が描かれる。もう一枚の漁場風景では、スクーナ船や和船が停泊し、鮭鱒の時期に、和人もアイヌも集い、所々で地引き網漁が行われている。鳥居があり、秋の例祭か、奉納や祈願の白と赤の神社幟が点在している。藁葺きのような仮小屋



No. 21 和船、和人の指揮のもとアイヌが網を引く様子、アイヌの舟の部分



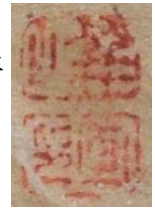
No. 22 スクーナ船・地引き網漁部分

で漁をしている様子も描かれている。

10) 印章 10「屏山」「画印」について

これまで紹介されていないが、No. 49「アイヌ母子図扇面」に使用されている。制作年代は不明。

別海町郷土資料館・加賀家文書館、石巻市博物館にも同じような印を使用したと見られる資料がある。今後、資料調査し、画像の比較を行いたい。

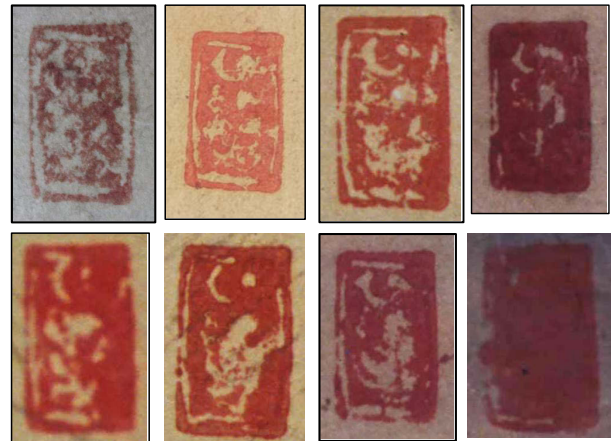


No.49 印章部分

12) 印章 12「印文不明」(長円印)について

No. 16「挨拶図」、No. 50「酒宴図」、No. 60「穴熊引き出し図」、No. 64「熊送り図」、No. 65「熊獵図」、No. 66「オムシャ図」、No. 67「貝突き図」、No. 68「眺望図」の印章は、長法印で印文不明だが、上部に三日月、あるいはひらがなのひに似た形があることが共通している。No. 16、No. 50、No. 60 はいくつかの文字のように見えるが、No. 64、No. 66 は何かの象形にも見え、別の印か、文字が潰れたのか不明である。

No. 50「酒宴図」は「卯秋仲日 屏山寫」の款記から、1855（安政2）年または1867（慶応3）年の作である。



No.16、No.50、No.60、No.64

No.65、No.66、No.67、No.68 印章部分

印章 12「印文不明」はオムスクの資料に複数見られ、1860年代に使用されていたことがわかる。

No. 57～68のオムスク造形美術館の作品12点は、一括の作品群として、制作年は同時期と考えられる。No. 59、No. 62、No. 63の洋紙には透かしがあり、そのうちNo. 59、No. 62の透かしは「J&JH 1862」と読めることから、1862年以降の制作とみる。No. 59「種痘図」は「辰冬初日 屏山寫」の款記から1868年作とわかる。先に紹介した「絵馬屋平澤屏山画帖」に「露国領事に明治元年屏山に画かしめ」とあり、「J&JH 1862」の透かしがある洋紙に描かれたNo. 59「種痘図」が明治元年の辰年作と制作年が一致することから、オムスクの作品群はロシア領事が1868年に屏山に制作させた絵である可能性がある。



No.59 透かし部分

筆者撮影

13) 印章 13「印文不明」(長円印)

No. 57「踏舞図」、No. 63「ウイマム図」の印章はオムスクの作品2点に見られ、1860年代の使用が確認できた。印文は不明。



No.57、No.63 印章部分

4. まとめにかえて

屏山は1857年頃にはアイヌを画題とした「種痘施行図」や「ウイマム図絵馬」を依頼を受けて制作

していることから、すでにその力量は高く評価されていたと言える。

ただし、アイヌを画題とし始めた正確な年代は不明であり、初期の定義は難しい。箱館に移り住んだ時期は1840年代半ば以降、1857年「種痘施行図」まで約10年の行動や作品は確認できていない。屏山以外の号を用い、アイヌ絵以外の作品を制作したことも視野に入れて調査を行う必要がある。

初期とされる印章1「平澤氏印」「屏山」の作者および制作時期については、別の作者として再考する余地を残しておきたい。屏山中心に工房として複数の人物による分業で制作した、屏山と同時代あるいは没後に屏山を模したアイヌ絵が制作されていた、あるいは没後に別の人物に印章が引き継がれた等、いくつかの可能性はある。

一例として、「蝦夷人〔刺漁〕之図」（無落款）を挙げると、「此絵ハ函館戦争ノ時同處ニ於購求云々」という品川弥二郎の識語があり、1860年代後半に函館で屏山作品に倣い別の作者が制作したものと考えられる。別の作者が屏山の号、屏山印を用いた例では、「マレク漁の図」がある。「狩野芳崖門人 本田天城 貳拾貳才画」と墨書があり、署名は「芳崖内 屏山」、印章「平澤氏印」「屏山」である。「本田天城」は本多天城と考えられ、1867（慶応3）年に生まれた東京美術学校第一期生の日本画家で、22歳ならば1899年頃の作となる。平沢屏山の没後に屏山を名乗り、アイヌ絵を制作する人物がいたことを裏付ける作品である。これらについては、今後調査を行い、印章の細部や作風を比較したい。

1850年代から最晩年まで、制作年代がわかる作品では、印章3「平澤氏印」「屏山」、印章5「平澤氏章」「屏山樵者」、印章6「背山臨水」の印章を主として用いている。

印章4「平澤」「屏山」印章の作品はすべて制作年不詳だが、1870年代の作品には見られない。1つのテーマを大きく捉えて簡素に描いた作品が多い。鮮やかな色材は用いていない。

印章3「平澤氏印」「屏山」と印章4「平澤」「屏山」、印章3「平澤氏印」「屏山」と印章5「平澤氏章」「屏山樵者」は一組の作品の中で同時に使用される。印章4「平澤」「屏山」と印章5「平澤氏章」「屏山樵者」は同時には使用されないことから、印章4「平澤」「屏山」から印章5「平澤氏章」「屏山樵者」へと移行したと見ることができる。

材質について、絹本の作品は数少なく、絹本は初期だけとされていたが、No. 55「オムシャ図」、No. 56「熊送り図」は絹本で、1871年に制作されたものである。そのため、制作時期を材質だけで判断することはできない。

落款については、初期から晩年まで、大半の作品が印章のみで款記はないが、1855/1867年、1868年、1871年の作品に款記があることを確認した。

この頃の屏山周辺の状況を考えてみる。

1866（慶応2）年、二代目杉浦嘉七は引退し、恒次郎が三代目嘉七を襲名し、家督を相続する。三代目杉浦嘉七は、商売の傍らで、1882（明治15）年から翌年にかけて、雑誌『巴珍報』では由縁舎色香という雅号で文芸活動にも携わる。この雑誌の挿絵を手がけた平福徳庵や沢田雪溪らの画家と交流があった。彼らは杉浦嘉七を通じて屏山のアイヌ絵を目にし、参考としたと考えられる。

1860年代後半頃から、屏山のアイヌ絵に芸術性あるいは装飾性が強くなり、屏山の作品に画家としての署名が添えられている。アイヌ風俗画は蝦夷地のイメージを伝えるもので、ある意味で「屏山」という銘柄のアイヌ絵は蝦夷地の産物とともに函館の名産品ともいえる。国内だけではなく、開港により、ブラキストンやロシア領事のように函館に滞在する外国人からの依頼もあった。同じ画題の作品を多数制作するため、工房のように弟子や画工らが作業工程に加わったり、忠実に臨写する画工がいた可能性も考えられる。

次に、種痘を画題としたNo.4「種痘施行図」(1857年)とNo.59「種痘図」(1868年)を比較し、最初の原型の制作から11年経過した後の画面構成や色彩の変化をみる。

No.4では種痘の状況だけをとりえていたが、No.59では実施された場所の説明が加わる。箱館奉行所建物内の広い板敷きの間で、村垣淡路守らは柱と襖で区切られた一段高い座敷から、桑田立斎らが種痘を施す様子を眺望し、奥の部屋に種痘を受けたアイヌに褒美として手渡される品が入った容器が積まれている。梁の方から下りた炉鉤に鉄瓶がかけられた囲炉裏、壁や柱、床などが描かれ、建物の一室としての空間を意識した画面構成となっている。画面は20.4×32.7cmと小さいが、主要な人物は網羅し、人物の配置や組み合わせを工夫し、群衆の人数を数名減らした程度で画面からあふれるほど密に詰め込まれる。和人の顔つきは、どの人物も似通っており定型化している。村垣淡路守らの背景の六曲一隻屏風には、函館山と麓の街並みを中心に、安政3(1856)年から文久3(1863)年にかけて建設された弁天岬台場や外国船の往来など、最新の情報が盛り込まれた函湾全景が描かれる。弁天岬台場の建設は杉浦嘉七らが請け負った。40代半ばの屏山の描写はより細密になっていく。黄色や青色がより鮮やかになり、衣服の切伏に鮮やかな青色が用いられる。



No.4 全体



No.59 全体



No.59 部分

屏山は、当初は一組の人物を中心とした簡潔な画面を描いた。その原型をもとに、同じ画題でくりかえし作品を制作していくなかで、基本の人物や風景は定型化し、組み合わせや配置を入れ替えて工夫する。それに加え、衣服の模様をより詳細に描き、民具は概観から、次第に構造や材質の表現にまで至る。さらに、背景の情報を付加し、遠景・中景の細部まで詳細に描き込んでいく。新たに見た特徴的な地形や建造物、スクーナ船や弁天岬台場等を積極的に画面に取り入れる。ひとつひとつ細部へのこだわりが際限なく追求され、画面を埋めていく。定型化は見られるものの形骸化に陥ることなく、新たな要素を取り入れ、進化していく傾向が見られた。

当初は使用している色数が少ないが、新たに鮮やかな色材を入手し、多彩で華やかな画面に仕上げていく傾向にある。色数が増えただけでなく、白色等の明るい色を混ぜることで中間色を出し、より多くの彩りを表現するようになっている。流通あるいは個人を通じて、外国からの画材を入手し、屏山が用いたことも考えられる。用いられた画材の変遷が、制作年代を判断する一助となることを期待する。

最後に、本研究プロジェクトの調査に際し、貴重な資料を調査させていただいた所蔵者、所蔵機関の方々、情報や画像を提供いただいた方々に深くお礼申し上げます。

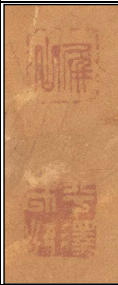
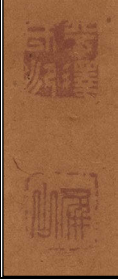
参考文献

「繪馬屋・平澤屏山のこゝろ」『北海道倶楽部』10月号所収 川崎左右一(越崎宗一)著 1936年

『アイヌ絵』越崎宗一著 1945 年
『アイヌ絵志』越崎宗一著 1959 年
『蝦夷地の中の日本』トーマス・W. ブラキストン著 1979 年 八木書店
『『蝦夷風俗十二カ月図』についてー平沢屏山とその作品』『北海道の研究 第 3 巻』所収 佐々木利和
著 1983 年 清文堂出版
『アイヌの四季と生活ー十勝アイヌと絵師・平沢屏山』(財)アイヌ文化振興・研究推進機構編 1999 年
(財)アイヌ文化振興・研究推進機構発行
『アイヌの美ーカムイと創造する世界ーロシア民族学博物館・オムスク造形美術館所蔵資料』(財)アイ
ヌ文化振興・研究推進機構編 2009 年 (財)アイヌ文化振興・研究推進機構発行
『アイヌ絵誌の研究』佐々木利和著 2004 年 草風館
『場所請負人福嶋屋杉浦嘉七四代物語』杉浦茂著 2004 年
『平沢屏山とその時代』 2022 年 市立函館博物館
岩手日報 1976 (昭和 51) 年 6 月 22 日付「アイヌ画家平沢屏山 大迫での生活判明」

平沢屏山 作品リスト

■花巻市博物館蔵

No.	資料名	所蔵	材質形状 本紙寸法	制作年代	落款・印章	全体画像		印章	
1	蝦夷風俗十二ヶ月屏風(三月)	花巻市博物館 32573	紙本着色 二曲一隻 屏風 130.0× 54.5cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「屏山」(朱文方印)、 「平澤氏印」(白文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				
2	蝦夷風俗十二ヶ月屏風(四月)	花巻市博物館 32573	紙本着色 二曲一隻 屏風 130.0× 54.5cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏印」(白文方 印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				

■岩手県立博物館蔵

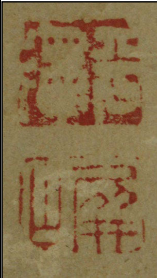
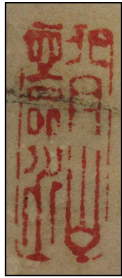
3	アイヌ風俗図	岩手県立 博物館 100388	絹本着色 掛軸装 44.5× 56.0cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				
---	--------	-----------------------	--------------------------------	--	---	---	--	--	--

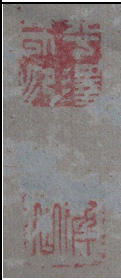
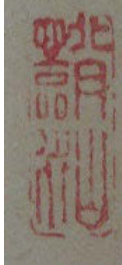
■東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館蔵

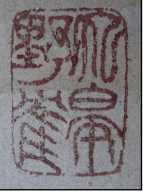
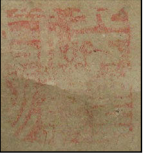
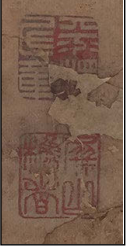
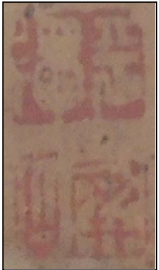
画像提供：東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

4	種痘施行図	東北福祉 大学芹沢 銈介美術 工芸館		1857 安政4年 70.4× 92.2cm	印章：「平澤氏印」(白文方 印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				
---	-------	-----------------------------	--	---------------------------------	---	--	--	---	---

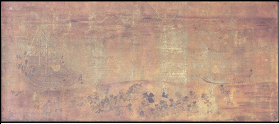
■市立函館博物館蔵

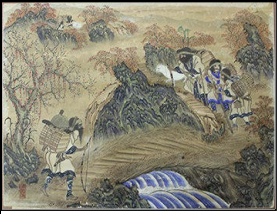
5	アイヌ風俗	市立函館 博物館 800107	絹本着色 掛軸装 109.0× 41.5cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印)、「屏山」(朱文方印)				
6	マレック狩の図	市立函館 博物館 800108	紙本着色 額装 60.5× 29.0cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				

7	アイヌ漁獵図	市立函館博物館 800109	紙本着色 額装 60.5 × 29.0cm		印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「嘯雲海」(朱文長方印)			 	
8	アイヌ熊狩の図	市立函館博物館 800111	紙本着色 額装 62.0 × 97.0cm		印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「嘯雲海」(朱文長方印)			 	
9	アイヌ風俗十二ヶ月 屏風（7月）	市立函館博物館 800112	紙本着色 六曲半双 屏風 129.0 × 51.0cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文長方印)			 	
10	アイヌ風俗十二ヶ月 屏風（8月）	市立函館博物館 800112	紙本着色 六曲半双 屏風 129.0 × 54.0cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏章」(白文方印)、「屏山樵者」(朱文方印) 印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文長方印)			 	
11	アイヌ風俗十二ヶ月 屏風（9月）	市立函館博物館 800112	紙本着色 六曲半双 屏風 129.0 × 54.0cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏章」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文長方印)			 	
12	アイヌ風俗十二ヶ月 屏風（10月）	市立函館博物館 800112	紙本着色 六曲半双 屏風 129.0 × 54.0cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文長方印)			 	
13	アイヌ風俗十二ヶ月 屏風（11月）	市立函館博物館 800112	紙本着色 六曲半双 屏風 129.0 × 54.0cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文長方印)			 	

14	アイヌ風俗十二ヶ月 屏風（12月）	市立函館 博物館 800112	紙本着色 六曲半双 屏風 129.0× 51.0cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏章」(白文方 印)、「屏山樵者」(朱文方 印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)		 
15	神祈図	市立函館 博物館 H10- 0051-45- 033	紙本着色 掛軸装 102.5× 48.5cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印)、「屏山」(朱文方印)		 
16	挨拶図	市立函館 博物館 H10- 0051-45- 034	紙本着色 掛軸装 61.5× 44.0cm		印章：「九臯野雀」(朱文方 印) 関防印：「印文不明」		 
17	母子図	市立函館 博物館 H10-51- 45-35	紙本着色 掛軸装 51.0× 38.0cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印)		
18	ウイマム図絵馬	市立函館 博物館 H29-0029	紙本着色 額装 107.0× 173.5cm	1855～ 1860 安政年間 1857 安政4年 か	印章：「平澤氏章」(白文方 印)、「屏山樵者」(朱文方 印) 墨書：「[安政口／年秋／箱 館／米平七／金晴丸／[人 名カ]」		 
19	蝦夷嶋奇観	市立函館 博物館 K-H13- 0444	卷子本 紙本着色 29.5× 1664.0cm		無		
20	ぼたん	市立函館 博物館 80110	紙本着色 額装 27.5× 51.5cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)		 

■函館市中央図書館蔵

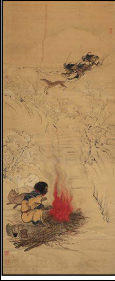
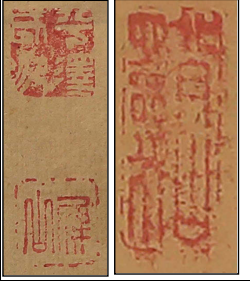
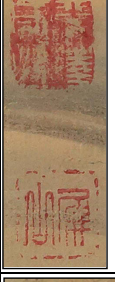
21	平沢屏山アイヌ画 1	函館市中央図書館 be000107	紙本着色 額装 60× 136cm	[1861～ 76年頃]	印章：2点か、「印文不明」 「印文不明」 関防印：「嘯雲海」カ(朱文 長方印)			
22	平沢屏山アイヌ画 2	函館市中央図書館 be000108	紙本着色 額装 60× 136cm	[1861～ 76年頃]	印章：2点か、「印文不明」 「屏山」(朱文方印) 関防印：「印文不明」			
23	アイヌ熊送の図	函館市中央図書館 be001170	絹本着色 掛軸装 117× 56cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印)、「屏山」(朱文方印)			
24	ゑぞ人うゑほうそう 之図	函館市中央図書館 be001171	紙本着色 掛軸装 28× 20cm		無			
25	蝦夷人冬期氷を破り て魚を捕る図	函館市中央図書館 gl348	紙本着色 額装		印章：「嘯雲海」(朱文長方 印)			
26	蝦夷人マレップにて 鮭を捕る図	函館市中央図書館 gl349	紙本着色 額装		印章：「嘯雲海」(朱文長方 印)			
27	蝦夷人川魚を捕る図	函館市中央図書館 gl350	紙本着色 額装		印章：「嘯雲海」(朱文長方 印)			

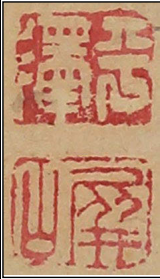
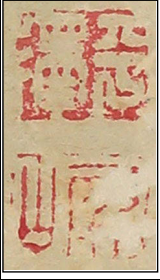
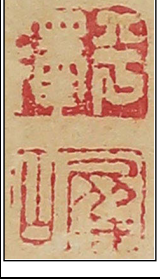
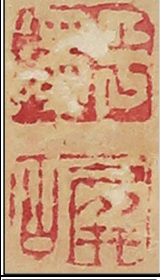
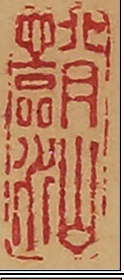
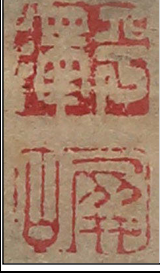
28	蝦夷人山越えの図	函館市中央図書館 gl351	紙本着色 額装		印章：「嘯雲海」(朱文長方印)			
29	絵馬屋平沢屏山画帖 林中八仙之図	函館市中央図書館 18106650 65	折帖 33× 24cm		印章：「草男」(朱文方印)、 「木々園」(朱文方印)、「屏 山樵者」(朱文方印)			
29	絵馬屋平沢屏山画帖 八仙ノ二				印章：「木々園」(朱文方 印)、「屏山樵者」(朱文方 印)			
29	絵馬屋平沢屏山画帖 竹林七賢				印章：「木々園」(朱文方 印)、「屏山」(朱文方印)		 	
29	絵馬屋平沢屏山画帖				印章：「草男」(朱文方印)、 「屏山」(朱文方印)			
29	絵馬屋平沢屏山画帖				印章：「木々園」(朱文方 印)、「平澤氏章」(白文方 印)			
29	絵馬屋平沢屏山画帖				印章：「鳳山」(朱文方印)			

29	絵馬屋平沢屏山画帖				印章：「鳳山」(朱文方印)		
30	大黒・恵比寿図	函館市中央図書館 be000136	紙本着色 額装 32.0× 62.0cm		印章：「屏山樵者」(朱文方印)、「平澤氏章」(白文方印)		

■天理大学附属天理図書館蔵

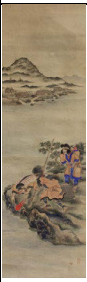
画像提供：天理大学附属天理図書館 / DNPpartcom

31	蝦夷風俗十二ヶ月：正月年礼之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-3 (1)	紙本着色 掛軸装 126.7× 50.6cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏章」(白文方印)、「屏山樵者」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文長方印)		
32	蝦夷風俗十二ヶ月：二月山獵之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-3 (2)	紙本着色 掛軸装 125.5× 52.7cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文長方印)		
33	蝦夷風俗十二ヶ月：五月鰯粕乾之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-3 (3)	紙本着色 掛軸装 127.0× 54.0cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文長方印)		
34	蝦夷風俗十二ヶ月：六月昆布採之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-3 (4)	紙本着色 掛軸装 126.5× 50.7cm	1872～ 1876 明治5～9 年頃	印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印)		
35	蝦夷風俗十二図：夷女挨拶之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (1)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文長方印)		

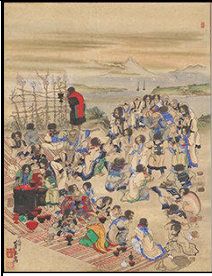
36	蝦夷風俗十二図：老人と若者	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (2)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印)				
37	蝦夷風俗十二図：雪中出獵のアイヌ	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (3)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				
38	蝦夷風俗十二図：瀑布前アイヌ	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (4)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				
39	蝦夷風俗十二図：溪流前アイヌ	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (5)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				
40	蝦夷風俗十二図：出獵之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (6)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：背山臨水(朱文長 方印)				
41	蝦夷風俗十二図：海岸男女之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (7)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：背山臨水(朱文長 方印)				
42	蝦夷風俗十二図：炊事之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (8)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				

43	蝦夷風俗十二図：水運之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (9)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印)、「屏山」(朱文方印)				
44	蝦夷風俗十二図：若者鮭漁之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (10)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				
45	蝦夷風俗十二図：夷女と小供	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (11)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				
46	蝦夷風俗十二図：乗馬之図	天理大学 附属天理 図書館 217-イ9-4 (12)	紙本着色 掛軸装 75.8× 28.8cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印) 関防印：「背山臨水」(朱文 長方印)				

■北海道博物館蔵

47	マレック漁図	北海道博 物館 126256	紙本着色 額装 29.8× 39.8cm		印章：「屏山」(朱文方印)			
48	マレック漁図	北海道博 物館 126257	紙本着色 掛軸装 131.5× 41.0cm		印章：「平澤」(白文方印)、 「屏山」(朱文方印)			
49	アイヌ母子図扇面	北海道博 物館 126258	紙本着色 扇面 14.5× 42.5cm		印章：「屏山」(朱文方印)、 「画印」(朱文方印)			

■国立アイヌ民族博物館蔵

50	酒宴図	国立アイヌ民族博物館 H29-2-1	紙本着色 掛軸装	1855 安政2年 または 1867 慶応3年	款記：「卯秋仲日 屏山寫」 印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「印文不明」(白文長方印)			
51	アイヌ出漁図	国立アイヌ民族博物館 80023	紙本着色 掛軸装		印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印)			
52	蝦夷人昆布採取図	国立アイヌ民族博物館 80022	紙本着色 掛軸装		印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印)			

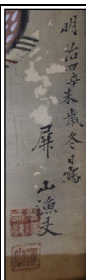
画像提供：東京国立博物館 出典：ColBase

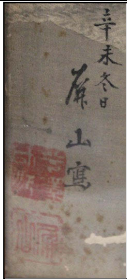
(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-9880?locale=ja)

■東京国立博物館蔵

53	アイヌ風俗図	東京国立博物館	紙本着色 額装	[1872 明治5年]	印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印)			
54	アイヌ風俗図	東京国立博物館	紙本着色 額装	[1872 明治5年]	印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印)			

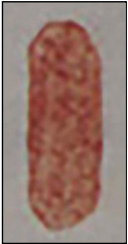
■東京国立博物館寄託・個人蔵

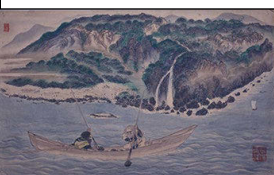
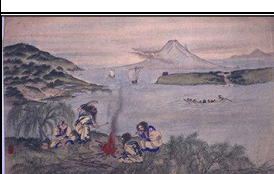
55	オムシャ図（幕末アイヌへの賜物式（オムシャ）の図）	東京国立博物館寄託・個人蔵	絹本着色 額装 56.0× 111.0	1871 明治4年	款記：「明治四辛未歳冬日 寫 屏山漁夫」 印章：「平澤氏印」(白文方印)、「屏山」(朱文方印)			
----	---------------------------	---------------	------------------------------	--------------	--	--	---	--

56	熊送り図（アイヌ人 熊祭（イオマンテ） 饗宴の図）	東京国立 博物館寄 託・個人 蔵	絹本着色 額装 54.0× 106.0	1871 明治4年	款記：「辛未冬日 屏山寫」 印章：「平澤氏印」(白文方 印)、「屏山」(朱文方印)		
----	---------------------------------	---------------------------	------------------------------	--------------	---	--	---

■オムスク造形美術館蔵

画像提供：オムスク造形美術館

57	踏舞図	オムスク 造形美術 館 KP8771- G3692	紙本着色 22.0× 32.6cm		印章：「印文不明」(白文方 印) 関防印：「印文不明」(長円 印)		 
58	夜間サケ漁図	オムスク 造形美術 館 KP8772- G3693	紙本着色 24.4× 40.8cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印)		
59	種痘図	オムスク 造形美術 館 KP8773- G3694	洋紙着色 20.4× 32.7cm 透かし 「J&JH 1862」	1868 明治元年	款記：「辰冬初日 屏山寫」 印章：「平澤氏印」(白文方 印)、「印文不明」(白文方 印)		
60	穴熊引き出し図	オムスク 造形美術 館 KP8774- G3695	紙本着色 24.3× 40.8cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印) 関防印：「印文不明」		 
61	鹿猟図	オムスク 造形美術 館 KP8775- G3696	紙本着色 24.0× 41.0cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印)		
62	斬首図	オムスク 造形美術 館 KP8776- G3697	洋紙着色 20.4× 32.7cm 透かし 「J&JH 1862」		無		

63	ウイマム図	オムスク 造形美術 館 KP8777- G3698	洋紙着色 20.4× 32.7cm 透かし		印章：「嘯雲海」(朱文長方 印) 関防印：「印文不明」(長円 印)			
64	熊送り図	オムスク 造形美術 館 KP8778- G3699	紙本着色 24.2× 41.0cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「印文不明」(白文 長円印)			
65	熊獵図	オムスク 造形美術 館 KP8779- G3700	紙本着色 24.0× 41.0cm		印章：「印文不明」			
66	オムシャ図	オムスク 造形美術 館 KP8780- G3701	紙本着色 24.2× 41.0cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印)、「屏山」(朱文方印) 関防印：「印文不明」(白文 長円印)			
67	貝突き図	オムスク 造形美術 館 KP8781- G3702	紙本着色 24.4× 40.8cm		印章：「平澤氏印」(白文方 印) 関防印：「印文不明」(白文 長円印)			
68	眺望図	オムスク 造形美術 館 KP8782- G3703	紙本着色 24.0× 40.9cm		印章：「印文不明」			

国立アイヌ民族博物館 研究プロジェクト2022A01
17～19世紀の蝦夷地像に係る図像史料等の基礎的調査
報告書

2026年3月31日発行
制作・編集 霜村紀子
発行 国立アイヌ民族博物館
北海道白老郡白老町若草町2丁目3番1号
<http://nam.go.jp>

※本研究は、国立アイヌ民族博物館調査研究プロジェクト2022A01
「17～19世紀の蝦夷地像に係る図像史料等の基礎的調査」の
アイヌ絵に関する研究成果の一部である。
掲載画像は転載を禁じる。